

今回の特集は「新田園都市思想」である。昨年9月につくば市と神戸市で「新田園都市国際会議2001」が開催されたことは、ご承知の読者も多いことと思う。この7月に英国でレッチワース100周年を記念して「CITIES OF TOMORROW」をテーマとする国際会議が予定されているが、そのプレ会議として神戸芸工大の齊木教授の獅子奮迅の活躍で開催されたものである。本財団もささやかながら協力、協賛させていただいた。

今回の特集はその内容を伝えつつ今後の展望を開く一石になることを願って、主要な参加メンバーに執筆および座談会をお願いした。当財団の立場、編集の立場からもいろいろの思いが積み重なった特集である。いささか私的な感想にわたるが、その間の事情を述べて編集後記としたい。

1969年の財団設立以来その本務として行ってきた「戸建て住宅地におけるまちなみづくり」あるいは「身近な住環境の形成」ということの意義は未だに社会的な理解を得ているとは言いがたい状況にある。端的に言えば、縦割りに分割された「都市計画」でもなく「建築計画」でもない、「まち」をつくり、育てる、というまっとうかつ包括的な視点もポジションもこれまでは存在しなかったということだ。

都市計画は「アーバンデザイン」など空中に漂うかのごとき都市構造論やデザイン論に走り、建築計画は様式や敷地という呪縛から逃れることができない。これに加えて分業的効率を優先させてきた制度、組織の数々。

都市計画や住宅計画とおおいに関係があり、住宅行政の対象でもある住(宅)環境という言葉も古くからあるが、公衆衛生、不良住宅の集合などの意味合いから、緑、景観、などの内容を加えつつある発展途上概念のようでもある。そもそも「良い環境」を定義することすら、一筋縄ではいかない。

昨年日本経済新聞社から上梓した『日本のコモンとボンエルフ』は「工夫された住宅地・まちなみ設計事例集」というサブタイトルとしたが、その調査は7年間に亘る難行苦行であった。当初は結果として「良い環境」をつくったはずの「工夫された」の意味が必ずしも明確ではなかったのである。調査を進めるうちに、敷地と道路の関係であり、歩

行者と車の関係が大きなテーマであることがあらためて確認され、書名も検索に掛かりやすい「コモン」と「ボンエルフ」としたが、究極のテーマが「いい環境」とは何か、であることはいまでもない。したがって、ことがらの性格上密集市街地の改善などにも大いにヒントになると考えている。

この間アメリカのニューアーバニズムの動きを知り、「歩いて暮らせる」「コミュニティ」というテーマが、商業主義のようでありながら社会の深いところから発せられたメッセージであり、近代都市計画、住宅計画に新たな視点を加え得るものであると感じた。また財団で行っている基盤整備のあとに住宅が登場する、というリレー的な住宅地供給の枠組みの限界も感じざるを得なかった。43号で「ニューアーバニズム入門」を特集した所以である。

この頃、蓑原敬氏の紹介で「新田園都市国際会議」を行おうとしていた齊木崇人氏と知り合い、この行事に参画するとともに、この行事に合わせて前述の『日本のコモンとボンエルフ』を出版し、次なる特集「まちなみ計画の新潮流」を発行する覚悟ができたのである。このような仕事に携わりながら、ハワード100年である1998年に何も具体的な行動を起こせなかったことが悔いになっていし、何より問題意識を共有できる仲間が増え、さらに強力な本誌の編集者江田修司氏がこの企画に乗ってくれたことが大きな力となった。これらの特集でニューアーバニズムと「田園都市」が今日的意義をもって同列に語られたことは、今後の都市論の発展にとって大きな意味を持つことになる。またDPZのインタビュー、P.カルソープの特別寄稿も画期的と言っていいたいだろう。

新田園都市国際会議は、各国からの熱烈な参加があり、内容的にもおおいに刺激を受けた。この特集でご紹介できるのは一部でしかないが、「田園都市」が依然として、いやむしろ国土計画、地域計画のレベルで、21世紀の課題であること、今回紹介できなかったがアジアからの発言は、地球規模での「人間の居住」の問題でもあることをも感じさせるものであった。

自画自賛になるようであるが、『日本のコモンとボンエルフ』の出版、この特集シリーズ、「新田園都市国際会議」の開催は、都市計画、住宅計画の活性化に相当の役割を果たしたのではないかと感じている。

(大川 陸)